

自己対象体験と対人関係のあり方との関連 —大学生を対象として—

The correlation study between self-object experience and interpersonal relationship in college students

小林 卓也

(東京成徳大学大学院 心理学研究科 博士後期課程)

Takuya KOBAYASHI (Graduate school of Psychology, Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究は、Kohut (1971, 1977, 1984) が提唱した自己心理学の一概念である自己対象体験について実証的に測定する尺度を作成すること、および自己対象体験と対人関係のあり方について、心理的依存性を用いて検討することを目的とした。調査は、239名の大学生を対象に行った。調査の結果、以下のようなことが明らかとなった。(1) 自己対象体験暫定尺度を因子分析した結果、鏡映自己対象体験および理想化自己対象体験の2因子が見いだされた。(2) 自己対象体験の高い者は、依存欲求が高かった。この結果より、個人の自己対象体験と日常における自己対象の備給との関連が示唆された。

キーワード：自己対象体験、自己心理学、Kohut

問題と目的

Kohut (1971, 1977, 1984) によって先鞭がつけられた自己心理学は、現在、精神分析内だけではなく様々な臨床現場において注目と支持を受け、その応用分野も多岐にわたるという特徴がある (Ornstein, 1978)。

Kohut (1971) は、幼少期の自己愛に関して対象愛へと成長するものと、健康的な自己愛へと発達するものの2つのラインがあると提唱した。そして、健康的な自己愛を形成するために必要なものとして、「自己対象」という概念を提唱した。「自己対象」とは、Kohut が自己心理学の中で提唱した重要な概念の一つであり、主体が経験する「他者の機能の内的経験」(Kohut, 1980) である。

したがって、特定の対象自体を指すものではない。また「自己対象体験」とは、他者が果たしてくれる特有の機能を私たちが経験する際の経験の側面を指しており (上地, 1994)、自己対象の内在化、すなわち変容性内在化 *transmuting internalization* が自己の凝集性 (cohesion) を高めるために重要であると考えられる。自己対象には、鏡映自己対象・理想化自己対象・双子自己対象 (Kohut, 1984) の3つがある。そして、自己対象体験はこの内在化が起こるために必要な体験である。以上のように、Kohut は幼少期の「自己対象体験」が自己の健康的な発達を促すとした。また、成熟した自己も生きる上で一時的な自己の断片化 *fragmentation* を経験する、とした。したがって、成人になっても、人間は自己対象を一

生涯求めつづけると考えられる。

我が国における自己対象体験を実証的に検討した先行研究としては、緒賀（1993, 2001）で自己対象体験に関する尺度の作成が行なわれている。緒賀（2001）では、鏡映自己対象関係体験・理想化自己対象関係体験・双子自己対象関係体験の3つの測定項目を設定している。そして、自己対象と考えられる人、つまり父親・母親・祖父・祖母・兄あるいは姉・弟あるいは妹・親戚・先生・同性の友人・異性の友人・先輩・後輩・その他の知り合いの人・メディアを通じて知っている人の名前を具体的にあげている。その上で、それぞれすべての人について3つの測定項目について3件法で回答を求め、その得点を分析している。これらの研究では緒賀（2001）も述べているが、1つの項目について、被調査者が自己対象を自由に想定するのではなく調査者が具体的な人物を提示して、その人物との間における「自己対象関係体験」について回答を求めている。したがって、自己対象体験に関して自己対象を自由に想定する尺度は、現在のところ存在しない。

ところで、青年期は自己を確立する上で重要な時期と考えられるが、その中で他者との関わりが大きな特徴の一つと考えられる。そこで本研究では、大学生の対人関係のあり方に注目してみたい。青年期において、自分自身への関心の集中と自信・優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求が特徴づけられよう。このような特徴は、特に対人関係の側面に影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究では、各個人の自己対象体験が青年期の対人関係とどのような関連を持つかを検討することを目的とした。

なお、本研究では対人関係を検討する側面として心理的依存性を探索的にとりあげた。これは、先述の「人間は一生涯において自己対象を必要とする」という観点から、発展的に考えられる。すなわち、自己対象体験は人間が外的対象との関係

の中で内在化していくものである。そして、我々が生活をする上で意識的・無意識的に自己対象を求め、自己対象の備給を行っているのではないかと考えられる。

依存性についての研究は、古くから親子関係・養育態度の問題に付随するものとして行われていた。依存性は、元来自立性の対極概念という捉え方がなされていた。例えば、江口（1966）などである。

しかし、その捉え方から離れて、依存性は発達に伴って消失するのではなく変容するものとして捉えられるようになった。そして関（1982）は、依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義した。この研究では、「依存欲求」「統合された依存」「依存の拒否」という3つの下位尺度を用いられた。これらの下位尺度には、以下のように定義づけられた。まず「依存欲求」は、「援助・慰め・是認・注意。接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」と定義づけられた。また「依存の拒否」は、「顕在的には、文字通り、他者への依存を拒否する形で現れるが、潜在的に、依存不安があると推測される態度である」と定義づけられている。そして「統合された依存」に関しては「成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、又、相互依存的な、他者との良好な関係を保ち、且つ、そこから得た安定感を基礎として自立的になるために、必要不可欠な依存性である」と定義づけられている。関（1982）は、これらの尺度を用いて心理的依存性と自己像の肯定度を検討した結果、依存性に男女差が見られたこと、女子や全体において「依存欲求」と「統合された依存」の間では正の相関が見られたが、「依存の拒否」と他の2下位尺度とは負の相関が見られたこと、「統合された依存」が適応上肯定的な意味を持つことを示すことなどが明らかとなっている。

以上の問題意識をふまえ、本研究では①自己対象体験に関して自己対象を自由に想定し回答を求める尺度を作成すること、②作成された自己対象体験尺度と心理的依存性を用いて、青年期における自己対象体験と対人関係のあり方がどう関連するか検討することを目的とした。

なお、本研究では以下の仮説を立てた。

仮説1：作成された自己対象体験尺度には、Kohut (1984) で述べられた3つの自己対象と同様の因子構造が見られるであろう。

仮説2：自己対象体験が高いほど、依存欲求は高いであろう。また、自己対象体験が低いほど、依存の拒否が高いであろう。

研究1 自己対象体験尺度の作成

方法

調査対象 関東圏のA大学及び甲信越地方のB大学の学部1～4年生229名(男子84名、女子144名、不明1名。平均年齢19.2歳)を対象とした。

調査材料 (a)自己対象体験暫定尺度：Kohut

(1971, 1977, 1984) や緒賀(2001)を参考に以下で以下の概念を想定し、暫定的な尺度を作成した。1つ目の構成概念は、「自分のすることを認めてくれる」など、自らの感情や行動に対してその感情・行動に支持的なものを想定した。また、2つ目は「その人のようにになりたいと自分があこがれている」など、理想とする対象に自分もなりたいたいといったものを想定した。そして、3つ目は「まるで双子の片割れのように、自分と同じようだと感じることもある」など、自分と同じ感情を持つ・自分と同じ行動をとるといったものを想定した。これら3つの構成概念に対応して項目を収集し、尺度を作成した。なお、自己対象体験暫定尺度は、心理学を専門とする大学教員2名と大学院生4名により構成概念の内容的妥当性が検討された。回答は5件法で求めた。

手続き 2002年7月に、大学の講義の時間を使い

質問紙による集団調査を実施した。なお、調査を始める前に学生が自己対象の想定を十分理解して回答が行えるように、「項目ごとに想定する人物が異なっても良いこと」「実際にあったことがない人物でも良いこと」など1～2分程度調査者から詳細な教示をした。回答に要した時間は、約15分であった。

結果

自己対象体験暫定尺度19項目に対して、男女込みで主因子法プロマックス回転を用いた因子分析を行った。その結果、固有値の減衰状況や解釈可能性を考慮し、2因子が妥当であると考えられた(Table 1)。各因子は、以下のように解釈された。第1因子は、「普段から自分の気持ちをよく理解してくれる」といった内容の項目群からなる。したがって、第1因子を「鏡映自己対象体験」因子と命名した。第2因子は「その人のようにになりたいと自分があこがれている」といった内容の項目群からなる。したがって、第2因子を「理想化自己対象体験」因子と命名した。そして、第1因子に.45以上の因子負荷量を示し、かつ第2因子の負荷量が.25未満である15項目を選択し、「鏡映自己対象体験」尺度を構成した。また、第2因子に.45以上の因子負荷量を示し、かつ第1因子の負荷量が.25未満である4項目を選択し、「理想化自己対象体験」尺度を構成した。「鏡映自己対象体験」尺度と「理想化自己対象体験」尺度の平均値、及び標準偏差は、Table 2の通りである。各下位尺度のIT相関及び α 係数を算出した。その結果、「鏡映自己対象体験」尺度のIT相関は.89～.91であり、 α 係数は.93であった。一方、「理想化自己対象体験」尺度のIT相関は.64～.74であり、 α 係数は.74であった。したがって、各下位尺度における信頼性は、ある程度高い値が得られた。

Table 1 自己対象体験尺度のプロマックス回転後の因子負荷量

項目	抽出因子		
	I	II	共通性
I 鏡映自己対象体験因子($\alpha = .93$)			
1. 自分の長所を見つけてくれる。(鏡)	.75	.01	.55
2. 自分と共通した考え方を持っている。(双)	.61	.01	.38
3. 自分の成長や向上を見守ってくれる。(鏡)	.60	.14	.48
4. 自分と同じ立場にたって物事を考えてくれる。(双)	.71	.01	.51
5. 自分のすることを認めてくれる。(鏡)	.65	.11	.52
6. 自分にとって本当の仲間のように感じる。(双)	.55	.21	.48
7. 自分のことをほめてくれる。(鏡)	.73	.05	.50
8. まるで双子の片割れのように、自分と同じようだと感じることもある。(双)	.61	.14	.29
9. 自分のことに関心を抱いてくれたり、目を輝かしてくれる。(鏡)	.78	.07	.55
11. 自分に何かうれしいことが起きたとき、それを我がことのように喜んでくれる。(鏡)	.74	.05	.51
13. 自分がする話にはいつもたいてい興味を持って耳を傾けてくれる。(鏡)	.60	.16	.51
15. 自分が元気がないと、すぐ気づいて気づかってくれる。(鏡)	.74	.05	.51
16. (思い浮かべた人物を)知っていることに誇りを感じる。(理)	.57	.17	.47
17. 日頃から自分の実力を評価し、認めてくれる。(鏡)	.77	.02	.61
19. 普段から自分の気持ちをよく理解してくれる。(鏡)	.81	.05	.60
II 理想化自己対象体験因子 ($\alpha = .74$)			
10. その人のようになりたいと自分があこがれている。(理)	.08	.46	.26
12. 自分よりも優れた能力を持っている。(理)	.13	.76	.48
14. 自分よりも色々なことを知っている。(理)	.10	.76	.52
18. 自分にできないことができるので、すごいと思う。(理)	.10	.60	.42
因子間相関	I	.46	
	II	.46	

*項目の後の()内は、(鏡)は鏡映自己対象体験を、(理)は理想化自己対象体験を、(双)は双子自己対象体験を想定して作成されたことを示す

Table 2 鏡映自己対象体験得点、理想化自己対象体験得点の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
鏡・得点	57.37	10.75
理・得点	16.31	2.84

考察

自己対象体験尺度の因子分析の結果より、本研究では自己対象体験に関して2つの因子が得られた。先行研究である緒賀(2001)は、「鏡映自己対象関係体験」因子・「理想化自己対象関係体験」因子・「双子自己対象関係体験」因子の3因子を抽出している。これらは、自己対象として各項目につき一人ずつ人物を提示し、回答を求めた。緒

賀(2001)で用いられた回答方法は、被験者が回答する際自己対象についての選択に関して自由度が低くなる可能性が考えられた。そこで本研究では、各項目において具体的な自己対象を提示せずに回答を求めた。そして、結果として緒賀(2001)の「鏡映自己対象関係体験」因子と「理想化自己対象関係体験」因子の2因子と同様の項目からなる2因子が抽出された。この結果から、「自己対象体験」に関して実証的な研究を行なう際、想定する対象を被調査者が自由に選ぶ形で回答を求めることが可能ではないかと考えられる。

また、本研究では自己対象体験尺度の因子分析結果より、2因子が妥当であると判断された。これは、Kohut(1971, 1977)で論じられた2側面の自己対象と同様であり、「鏡映自己対象体験」

と「双子自己対象体験」は一つにまとまる結果となった。Kohut (1984) では、「双子自己対象」を臨床経験と臨床的現象をより深く理解した結果として独立して論ずることとした、と述べている。すなわち、「双子自己対象」は臨床家の視点でクライアントとの臨床的現象を考えていく場合、独立して論ずる必要があると考えられる。一方、本研究は臨床家の視点からではなく実証的な研究として、一般学生の自己対象体験について質問紙調査を用いて検討したものである。そのため、「鏡映自己対象」と「双子自己対象」を区別せずに、被調査者の自己対象体験を2つの因子から捉えることが可能ではないかと考えられる。

研究Ⅱ 自己対象体験と大学生における対人関係のあり方との関連

方法

調査対象 研究1と同様であった。

調査材料 (a)自己対象体験尺度：研究Iで作成された自己対象体験尺度を用いた。

(b)依存性の自己評定質問紙 関 (1982) が作成したものをを使用した。この尺度は、「依存欲求 (全13項目)」・「依存の拒否欲求 (全13項目)」・「統合された依存 (全13項目)」の3つの下位尺度から構成されている。この内、「統合された依存」尺度に関しては人物のみを対象として回答を求めている。一方、Kohut (1984) を発展的に捉えると、自己対象は必ずしも人物のみを対象とするものではないと考えられる。したがって、本研究では「統合された依存」尺度を用いなかった。これらの尺度については、全て5件法で回答を求めた。

結果

まず、依存欲求得点および依存の拒否得点に関して、平均値と標準偏差を求めた (Table 3)。次に、各自己対象体験得点と依存欲求得点および依存の拒否得点との相関を求めた。その結果、両

者において有意な正の相関が見られた (Table 4)。そこで、各自己対象体験得点と依存欲求得点および依存の拒否得点との関連をさらに詳しく検討するため、各自己対象体験得点の平均値を基準に被験者を高群と低群に分け、各自己対象体験得点の高低の2群間で依存欲求得点・依存の拒否得点に関しt検定を行った (Table 5-1, 2)。その結果、鏡映自己対象体験得点 ($t(211) = 2.82, p < .01$) 及び理想化自己対象体験得点 ($t(213) = 2.42, p < .05$) が高いほど、依存欲求得点が有意に高かった。一方で、各自己対象体験の高低における依存の拒否得点に、有意差は認められなかった。

Table 3 依存欲求得点、依存の拒否得点の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
依存欲求得点	44.09	8.38
依存の拒否得点	35.98	8.28

Table 4 鏡映自己対象体験得点、理想化自己対象体験得点と依存欲求・依存の拒否得点との相関

	依存欲求得点	依存の拒否得点
鏡・得点	.22**	-.09
理・得点	.22**	-.03

** $p < .01$

Table 5-1 鏡映自己対象体験得点の高低における依存欲求・依存の拒否得点の平均と標準偏差

	鏡映自己対象体験得点		df	t値
	高群	低群		
依存欲求得点 (高群:n=111、低群:n=101)	45.60 (8.12)	42.43 (8.26)	211	2.82 **
依存の拒否得点 (高群:n=113、低群:n=104)	35.33 (8.21)	36.65 (8.23)	216	1.19

()内は標準偏差

** $p < .01$

Table 5-2 理想化自己対象体験得点の高低における依存欲求・依存の拒否得点の平均と標準偏差

	理想化自己対象体験得点		df	t値
	高群	低群		
依存欲求得点 (高群:n=107、低群n=107)	45.44 (8.27)	42.69 (8.24)	213	2.42 *
依存の拒否得点 (高群:n=110、低群n=109)	36.23 (8.21)	35.69 (8.39)	218	0.48

()内は標準偏差

*p<.05

考察

各自己対象体験尺度と依存欲求・依存の拒否尺度におけるt検定の結果は、以下の通りであった。まず、鏡映・理想化の2つの自己対象体験が高い者は、心理的依存性が高かった。これらの結果からは、鏡映的な自己対象体験は、他者からの賞賛や感情の映し返しから自己に内在化されるものである。したがって、鏡映自己対象体験が強いと、他者への依存欲求は強くなると考えられる。また理想化自己対象体験は、外的対象との関わりの中で理想や目標を内在化させていくものである。したがって、依存という形で理想や目標を求める傾向が強くなるのではないかと考えられる。

一方で、鏡映・理想化自己対象体験尺度と依存の拒否得点との間には有意な相関が見られなかった。そして、自己対象体験尺度の2つの下位尺度得点において、得点が高い者と低い者間で依存の拒否得点の有意差は見られなかった。この結果については、被調査者の社会的な望ましさが回答に反映されたことが考えられる。依存の拒否尺度には、「友達には、絶対に借りをつくりたくない。」や「親切な申し出を、特に理由なく、断ることがある。」など、回答する上で被調査者の意識が影響しやすい項目が存在する。この点より、被調査者が回答する上で社会的な望ましさを考慮して回答したために、自己対象体験尺度の2つの下位尺度得点との相関は見られなかったのではないかと考えられる。このような被調査者の意識が反映されやすい項目については、項目内容や教示の仕方

に検討が必要であると思われる。

総合的考察と今後の課題

以上のように、本研究では自己対象体験尺度の作成を試み、自己対象体験を一般青年の心理的傾向として、実証的にも捉えることが可能であることが示唆された。そして、依存欲求のあり方を通して、自己対象体験と対人関係のあり方が検討された。

そこで、今後の課題としては以下のことが考えられる。まず、研究1で作成された自己対象理想化自己対象体験尺度は、鏡映自己対象体験尺度が15項目、理想化自己対象体験尺度は4項目で構成されている。これらの下位尺度はKohut (1984)の概念を基に構成されたが、2つの下位尺度間で、項目数にばらつきが見られる。したがって、これらの下位尺度、特に理想化自己対象体験尺度において、項目数を増やして再度検討を加えることが望まれる。

また、自己対象体験について質問紙を用いて検討する場合、被調査者の自己対象体験をどれだけ項目に反映することができるかを更に検討する必要がある。本研究で作成が試みられた自己対象体験尺度は、被調査者に自己対象を自由に選択させ、その自己対象との間の体験について回答を求めるといった形式を用いた。この形式は、被調査者の自由度が高くなる一方で、回答の対象となる体験があいまいになり、回答が難しいことも考えられる。したがって、被調査者が自己対象体験について回答しているかどうか、他の諸概念との関連を検討するなど併存的な妥当性を確かめる必要がある。

最後に、本研究では自己対象の内在化を心理的依存性という視点から捉えた。しかしながら、一般青年は、外的対象を自己対象として取り入れながらも、自己の凝集性は安定して保たれていると思われる。この点から、自己対象を求めるということを心理的依存性という視点から検討すること

は、自己対象を必要とするという現象を狭めて捉えている可能性が示唆される。したがって、外的対象を自己対象として捉えることに関連があると推測される第3の変数を用いて、更に検討を深めることが重要であると考えられる。

引用・参考文献

江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.

Gabbard,G.O. 1989 Two subtypes of Narcissistic Personality Disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53, 527-532.

Goldberg,A.Ed. 1980 *Advances in self psychology*. NewYork:International Universities Press. (ゴールドバーグ, A. 編 岡 秀樹訳 1991 自己心理学とその臨床 岩崎学術出版社)

伊藤 洸 1992 コフートの自己心理学 氏原 寛・小川 捷之・東山 紘久・村瀬 孝雄・山中 康裕 共編 心理臨床大事典 培風館 Pp. 107-110.

伊藤 洸 1992 自己心理学 氏原 寛・小川 捷之・東山 紘久・村瀬 孝雄・山中 康裕 共編 心理臨床大事典 培風館 Pp.1000-1001.

Kohut,H. 1971 *The Analysis of the self*. New York:International Universities Press. (コフート, H. 1994 水野 信義・笠原嘉監訳 自己の分析 みすず書房)

Kohut,H. 1977 *The Restoration of the Self*. New York:International Universities Press. (コフート, H. 1995 本城 秀次・笠原嘉 監訳 自己の修復 みすず書房)

Kohut,H. 1984 *How does Analysis cure?* Chicago and London:The University of Chicago Press. (コフート,H. 1995 本城 秀次・笠原 嘉監訳 自己の治癒 みすず書房)

久米禎子 2001 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係—自己の安定性との関連から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.

丸田俊彦 1994 コフート理論とその周辺 岩崎学術出版社

宮下一博・上地雄一郎 1985 青年におけるナルシシ

ズム(自己愛)的傾向に関する実証的研究(1) 総合保健科学, 1, 51-61.

緒賀 聡 1993 自己-対象関係尺度作成の試み—女子青年を対象とした予備的調査— カウンセリング研究, 26(1), 38-44.

緒賀郷志 2001 自己対象体験尺度作成に関する基礎的研究—質問項目と妥当性の検討— 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 50(1), 125-132.

Ronald R. Lee & J. Colby Martin 1991 *Psychotherapy after Kohut:A textbook of self psychology*. The Analytic Press, Inc. (R.R.リー J.C.マーティン著 竹久安彦 堀史朗 監訳 1993 自己心理学精神療法 コフート以前からコフート以後へ 岩崎学術出版社)

関 智恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 京都大学教育学部心理教育相談室 臨床心理事例研究, 9, 230-249.

<付記> 本稿は、平成14年度東京成徳大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部に加筆・修正したものである。また、本稿の一部は日本カウンセリング学会第37回大会において発表した。

The correlation study between self-object experience and interpersonal relationship in college students

Takuya KOBAYASHI (Graduate school of Psychology, Tokyo Seitoku University)

ABSTRACT

The purpose of this study was (1) to develop a scale which measures the self-object experience which is one of the concepts of self psychology Kohut (1971, 1977, 1984) advocated, and (2) to investigate correlations between the self-object experience and interpersonal relationships with others, using the tendency of dependency. The questionnaires were administered for 239 college students. The investigation revealed the following results. (1) Through factor analysis, two factors were found for the self-object experience: experiences of the self-object for mirroring and the one for idealization. (2) The desire for dependency was higher for participants who scored highly on the two subscales of the self-object experiences than for those who scored low on those measures. Therefore, it was suggested that the cathexis of the self-object in daily life has relationships with one's self-object experiences.

KEYWORDS : self-object experience, Self psychology, Kohut